

【「にぎやかな家」梗概】

木造二階建て、築六十年くらいのもので、その古い家には、かつて五人が住んでいた。祖母と父母と姉と私だ。姉と私が進学を機に家を出て、しばらくして祖母と母が相次いでこの世を去った。広い家に一人になった父は、隣家との境界が狭まる妄想にとらわれ、数年の入院をへて、高齢者施設に移った。

誰もいなくなった家は荒れはじめ、同じ市内のアパートにいた私が引っ越し、一人で住むことになる。

隣のアパートからは、婆さん爺さんの話し声や生活音が、まるで同じ家に住んでいるかのように聞こえてくる。反対側の隣家からもシングルマザーらしい女性の怒鳴り声が響いてくる。古い家の中になると、家族の思い出もよみがえる。蟻やクモ、ヤモリもいて、外では蟬が騒がしい。そんな「隣人たち」を見たり感じたりすることで、生きることにかかわるさまざまな思いがわき起こる。